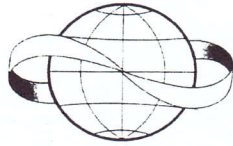


# ヴィーナス通信

Venous (静脈) Venus (護美の女神)



## 第19号

発行 東多摩再資源化事業協同組合  
 理事長 紺野武郎 編集長 吉浦高志  
 東京都東村山市久米川町 1-16-18  
 Tel&Fax 042-395-9788

### 製紙業界の

### 見識を問う!

二月に入って製紙メーカー各社は、一斉に新聞・段ボール古紙などの価格値下げを断行した。

それに伴って、問屋買い入れ価格も下がり、現在新聞古紙(三〇四円/kg)・段ボール古紙(二〇三円)・雑誌(〇〇一円)となった。

民間の回収業者が古紙回収を円滑に行うには、最低でも一〇円程度のコストが必要となるが、ほど遠いものとなってしまった。

このコストの不足分は、市民の奉仕や地方自治体の助成そして排出事業者の負担に加えて、回収業者の極限までの努力と犠牲のものと賄われている。

さらに民間に替わって自治体が直接回収をした場合、三〇円以上かかっている所がほとんどであり、製紙業界はこの様な実態を見て見ぬ振りをしている。

我が国の製紙産業は、昨年一年間で三千百八十三万トンの紙・板紙を生産し、その九五%以上が国内で使われ古紙として排出されている。

しかもその古紙をまた、五七%も原料として再利用しなければ、

日本の製紙産業は成り立たない仕組みになっている。

つまり国際市況には殆ど左右されない内需産業であり、製造・販売・排出者としての責任も負わなければならない立場にある。

製紙業界はここ数年飛躍的な生産の伸びを示し、バブル絶頂期の一〇年前に比べて二八〇万トンも紙の生産増となり、増収増益の好環境を推移している。

紙の大量生産は古紙の大量発生につながり、余剰化を誘って古紙価格を下げてくる。その結果、生ごみ同様に一般廃棄物化させ、清掃行政に回収コストの負担をさせる。低価格になった古紙を使い、さらに大量生産・大量廃棄を目論む製紙メーカーの暴挙をこれ以上許していいのだろうか。

経済産業省並びに製紙連合会は、昨年末に古紙利用率が五七%に達したこと、さらに今後五年間で六十%まで向上させる「リサイクル六十計画」を発表した。これを従来通り国内発生古紙を使って達成するならば、先進国の中でも驚異的な古紙リサイクル国といえる。なお六十計画は、紙の生産を現状のまま据え置いたとしても、毎年二〇〇三〇万トン新たな古紙の回収を積み重ね、今より百二十万ト

ン以上の回収増を計らなければならない大仕事なのだ。

それには、廃棄物になる前のきめ細かい再資源化をする回収業界の拡充が必要絶対条件となることは言うまでもない。

同時に利用率を向上させる最も有効な手段は、分母となる発生抑制を強く訴えることだ。

ダイレクトメールや通販カタログ・新聞の折込チラシなどに使われている輸入用紙の使用も見逃してはならない。

輸入用紙には国内古紙が一枚も再利用されないだけでなく、家庭に配送された時点で百分国内古紙になっってしまう。僅かな価格差で安易に輸入用紙を使う企業に抗議し、コスト負担をするシステムも考えてほしい。

紙を作る人・輸出入する人・その紙を利用して新聞や本を発行する人・箱や包装紙を作る人・販売する人・消費する人・古紙を集める人など、関係各界の人々が叡智を結集して、紙を作る前・使う前・古紙になる前の段階から徹底して見直すときが来たのではないだろうか。直言拝聴にご寄稿の中村さんも「古紙問題市民ネット」の代表として活躍され、今回の古紙値下げを、厳しく追及している。



## 直言拝聴

## 「大量リサイクル社会」は持続可能な社会ではない

環境ジャーナリスト

古紙問題市民行動ネットワーク代表

中村正子



「資源循環型社会」とは大量リサイクル社会ではない

1の資源を3にも4にも使い回すのは、資源小国で世界一の資源輸入国に生まれた私たちの使命といえるだろう。しかし、それは、川上で純資源の輸入や消費を極力押さえた上での話である。純資源の消費削減の面からはもちろんのことだが、そうでなければ、再生資源のスムーズな循環は困難だからである。

しかし、循環型社会形成推進基本法を初めとする昨二〇〇〇年にできた改正・制定六法を見ても、一番大事なはずの発生抑制の具体的な視点がほとんどない。また、新たにできた法律も、建設リサイクル法などリサイクル法ばかりである。

国がいう「資源循環型社会」とは、どう読んでみても、「大量リサイクル社会」のことではない。「大量生産・大量消費」はこれまでのままで、大量に出てきたものは大量リサイクルすることで処分場に回しさえしなければいいということではないか。

なぜならば、川上での大量純資源輸入や消費を転換していくための施策がまったくないのである。また、大量リサイクルによりどの

ように再生利用がされるのか、本当に必要なものとして使うことができるのか、総合的なコストや環境負荷も考え、合理的に考えているかなどがまったく不明である。

どんなに金がかかろうとも、「リサイクル」という大義名分や「ビジネスチャンス」の創出などというところで、川上を絞ることなく税金を使いやれるところまでやっていこうということのようだ。

しかし、こんなに物が溢れ、純資源ものさえ価格破壊の現状のなかで、再生資源が大量に発生しても、循環ができるはずはない。

業界紙を見ていると、古紙、古繊維、鉄、非鉄など、従来、市場原理で動いてきた民間業界は総じて衰退の状況に見える。前述したいくつものリサイクル法が動くことで、そうした傾向に拍車がかからなければならないのだが。

純資源を使い、ゴミになるものを作り出すほど金がかかる。「純資源の消費を抑制し、再生資源の消費を促す仕組み」で思い浮かぶのは、九七年六月にかけたデンマークである。デンマークは北海道より小さい面積に約五二〇万人が住み、環境問題に抜本的に取り組んできた国である。

また、「ノーマライゼーション」

の思想を生んだ国でもあり、福祉大国である。高額の税金が取られても、政府予算の七割近くは教育、福祉、高齢者、健康管理に使っている。

デンマーク在住三〇年以上であるケンジ・ステファン鈴木さん（風の学校の主宰者）に言わせると、「それらすべての基本には、人が安心して生きていけるといいう人権の尊重がある」そうだ。

一九七〇年代前半から省エネやコージェネレーションに取り組み、クリーンで安全なエネルギーをと、補助金をつけて風力発電やバイオマス発電などに取り組んできた。現在は約五三〇〇もの風車が回り、風力発電で発電量の約一〇%をまかなおうという状況にある。

廃棄物政策にも、経済誘導の仕組みがきている。

鉱物資源などの原料の採掘や輸入には一立方メートル当たり五デナマーククローネ（約七五円。二〇〇一年二月末現在、DKⅡ約一五円）の資源税がかかる。ということは、再生資源を使う方が七五円安くてすむということだ。

清涼飲料やビールは基本的にリターナブルびん（平均三三回転）であり、缶容器は禁止されている。ワイン、ビール、酒、ミネラル



ウォーター、清涼飲料、食酢などの使い捨て容器にはその種類と大きさにより課徴金がかかる。例えば、ガラスやプラスチック製容器の場合は一〇〇〜六〇〇ccが〇・五DK(約八円)、六〇〇〜一〇六〇ccが一・六二DK(約二四円)一〇六〇cc以上が二・二四DK(約三四円)だ。

リターナブルのびんやペットボトルの回収はデポジット制度で、九五%以上が回収されている。デポジット料金はビールびん一・二五DK(約二三元)、ペットボトル五DK(約七五円)である。

また、流通段階でも、使い捨てのコップや皿などの容器には卸売価格の五〇%の課徴金がかかる。

輸入、生産段階から企業にこのように課徴金がかかるのだから、市民・消費者も自治体回収にゴミを出せば有料である。しかし、町角の分別コンテナや地域の分別回収センターに持参すれば無料である。

面白いのは、自治体がゴミを処理する時にゴミ税を国に払うことだ。焼却一トン当たり二一〇DK(約三一五〇円)、埋め立て一トン当たり二八五DK(約四二七五円)である。

現在、「廃家電電子機器指令」の

ように、デンマークも参加しているヨーロッパ連合はEPR(拡大生産者責任・生産企業の責任で回収や再資源化を行う。コストは製品価格に上乗せする受益者負担の仕組み)を進めている。これは、廃棄後の処理・処分を自治体が税金で行うことへの一大転換を促すものだ。

しかし、わが国の容器包装リサイクル法にしても、家電リサイクル法にしても、前述したEPRとは言えない。

わが国の過渡的な段階では、得をする方を選ぶと環境によいというデンマークのこうした経済誘導の仕組みを、ぜひ導入したいものである。

古紙ネットから製紙メーカーへの抗議文の内容は

話は一転するが、そうでなくてもコスト割れで低価格だった古紙価格を、この二月、製紙メーカーがさらに値下げした。

私も参加している古紙問題市民行動ネットワークでは、三月二日に製紙メーカー各社に次のような抗議文を送ったので、部分的に紹介したい。

この中にもリサイクルの問題点が浮き彫りにされていると思うからである。

《二回の公開質問状を製紙メーカーに出して》

私たち古紙問題市民行動ネットワークは一九九三年四月に発足して以来、持続可能な古紙循環システムの実現に向けて、古紙需要拡大・再生紙使用拡大キャンペーン、環境保全型紙づくりの提案、システムづくりのための検討、シンポジウムなどの取り組みを重ねてきました。また、実際にメンバー各自が地域で集団回収などに関わる中で、良質な古紙をできるだけ安くコストで(社会的コストが安い)循環させる従来の民間古紙回収システムを高く評価しています。

前述した活動の一環として、古紙が余剰した翌一九九八年に、下がり続ける古紙価格について「生産者としての環境責任や古紙回収コストの分担をどう考えるか」などの公開質問状を出しました。また、翌九九年秋にも再び、「古紙回収業界・問屋業界という既存の民間システムへの評価や存続について、古紙価格の安さについて」などの公開質問状を出し、一六社中の一〇社から回答をいただいています。その回答ではいずれの会社も「資源循環型社会を支えていくためにも、既存の民間システムはなくてはならない機能をもつてい

る」「古紙の品質や回収、分別コスト、安定供給の面で高く評価している」「日本の古紙の高回収率はこのシステムが最大の要因であり、今後とも五六%の古紙利用率を実現するためにも、存続が必要」と、民間システムの重要性について言及しています。

また、古紙価格に含まれるべき回収コストについても、「回収コストについては、製紙メーカー、古紙業界、自治体、消費者など社会全体で分担すべき」「リサイクルの責任が大きい製紙メーカーで、古紙循環コストを価格に内部化させる仕組みづくりの必要性」などの回答がありました。

しかしながら、その後も古紙価格はいつこうに上がらないままで、やむなく一部自治体が業者に補助金を出さざるをえない事態のまま二〇〇一年を迎えました。ところが、この二月、驚いたことに製紙メーカーは古紙価格を新聞古紙五〇銭、段ボール一円値下げしたと聞きました。それも、「二〇〇五年までに古紙利用率の六〇%達成」を製紙業界が発表した矢先のことです。この製紙メーカーのさらなる値下げは、前述した私たち古紙ネットへの回答に反するものであり、大きな憤りを感じます。



《税金でのコスト負担はまちがっている》

かつて、資源小国のわが国では、古紙は名実ともに大事な製紙原料であり、だからこそ、民間システムが市場原理で循環させることができていたわけです。しかし、紙の生産量の増大につれ、一般廃棄物に含まれる紙ゴミ量は激増していきます。それは民間の古紙回収システムでは吸収・調整しきれない量であり、ゴミ減量のために収集する自治体が増えました。紙から紙へと循環できる古紙の量は、一九九九年の古紙利用率五六・一％を例にとると、約一七〇〇万トン余と限りがあります。しかも、古紙の他用途開発があまり進んでいないので、自治体が税金を使い収集した紙ゴミも、この民間古紙回収ルートに流入していきま

す。製紙メーカーから見れば、税金を使ったコスト格安の古紙（紙ゴミ）が回収業者以外からも手に入るの、古紙価格に回収コストなど見る必要はないと、値下げを続けることができるわけです。しかし、これは生産者としての製紙メーカーの責任を放棄することではないでしょうか？

に生産された結果であり、そのツケが最終的に回収業界に押し付けられているからです。目前の利益しか考えず、コスト無視で税金を当てにした古紙価格の設定は、長年築いてきた民間回収システムを破壊しつづつあります。

自治体では税収が減っている一方で、今後ますます福祉や高齢者に税金をふり向けていかねばなりません。廃棄物処理やリサイクルといえども、社会的コストをできるだけ小さくすることがさらに問われていくでしょう。回収コストを税金に負担させるようなことが許容されるはずはありません。

#### 《スウェーデンでは紙の生産者責任が》

資源の枯渇や温暖化などの地球規模での環境問題、身近なゴミ問題などから見ても、大量生産・大量消費という従来の産業・社会システムが持続可能ではないことは明らかです。しかし、生産者はつくりつばなし、ゴミ処理は自治体が税金でというこれまでの仕組みのままでは大量生産・大量消費の仕組みが変わらないことも、これまた、明らかです。そこで、ドイツやスウェーデンなどの環境先進国では、廃棄後にかかるすべてのコストを製品価格に上乗せして生

産者責任で処理をするシステムへの転換を実践しています。

例えばスウェーデンでは一九九四年一〇月から、包装、タイヤと並び、「古紙に対する製造者責任に関する政令」が施行されています。具体的には、新聞・チラシ・折り込み広告・電話帳・通販カタログなどの紙の製造者・輸入者・印刷者・ユーザーなどが対象です。

スウェーデンでは日本のような古紙回収の仕組みはないので、関わる事業者が経費を分担して回収・リサイクルの仕組みをつくり、目標値めざして再使用・リサイクルを実施しています。

ヨーロッパ連合では昨二〇〇〇年、ほとんどすべての廃家電・電子機器を製造メーカーが回収・リサイクルすべしという「廃電気電子機器指令」を決め、加盟一五カ国では二〇〇六年から実施されます。もちろん、EUに輸出してきたわが国のメーカーも例外ではありません。

こうした、生産者が責任を持つて廃棄後の回収リサイクルを行い、コストは製品価格に上乗せするという流れは、世界的に今後ますます大きく強くなっていくことでしょう。そのためにも、民間の社会的コストの安い古紙循環システム

を存続させ、確立させることが必要なのではないのでしょうか。そこまでを視野に入れて考えれば、「古紙価格を下げて自治体から古紙は入る」というような現在の対応の誤りは明らかだと思えます。

これらのような理由で、私たちは、業績が黒字でありながら、さらに回収業界にダメージを与える古紙価格の値下げを行う製紙メーカー各社に抗議するとともに、長期的で総合的な視野に立った「社会的コストが最も安く持続可能な古紙の循環システム構築」をこそ、製紙業界に考えていただきたく提案するしだいで

多摩六都で集められた雑古紙100%使用！

完全無漂白！

地球環境にもお尻にも優しい！

小中学校・公共施設等で本格採用！

**トイレットペーパー**  
**「ブーメラン」(100m巻)**

1ケース(100ロール入り)

4000円(税・配達料込)

注文は電話・FAX・Eメールで受付けています。

電話・FAX: 042-395-9788



### 集団回収の重要性

#### を再確認

去る、二月一六日(金)東村山市民センターに於いて、集団回収委託業者を集めて研修会を行なった。

この研修会は近年、各種リサイクル法が成立し、資源の有効利用が益々重要な課題となり、行政主導による回収が加速される中で、集団回収の重要性を見直すと共に、最近問題になっている集団回収で出された資源物の抜き取り行為の取り締まりや対処方法などを主な議題として開かれた。

冒頭に紺野理事長から、各種リサイクル法について説明があり、また、東京都など自治体の回収拡大で古紙の発生量が増えメーカーの在庫増で古紙価格引き下げの動きが広がっている事、また古布が中古衣料や反毛材、ウエス製品の売れ行き不振で非常に厳しい状況にある事などの近況報告があり議事にはいりました。

議事では資源物の抜き取り行為は、窃盗罪に該当する明らかな違法行為であることを確認し、予防策としては、集積所に集団回収の表示をする・回収車に回収契約車とわかる表示をする・契約回収業者

者と団体間で今まで以上に正確な打ち合わせを行なうこと、また、被害にあった場合は組合が作成した被害届を団体か業者が警察に届ける・目撃したら110番通報し、組合にも報告するなどを、対応策としてお願いした。

其の後の議事では田無市と保谷市が合併し西東京市になったことでの補助金、補助金対象品目の変更の報告・各市の集団回収委託契約の厳守と徹底・事務的手続きの注意(回収伝票の速やかな受け渡し等)を各業者にお願いした。

組合としてもこのような研修会を設けて更なる集団回収の充実を計って行きたいと思えます。市民の皆様、集団回収のご協力を宜しく願います。(小畑)

### 作業時の安全確認

#### の徹底を計る

三月一〇日四時寄り久米川ホールにて、安全講習会が開かれ組合員、組合従業員が全員参加した。

始めに、紺野理事長がリサイクルの現状と、毎年行はれる講習会の重要性を話した。続いて萩原厚生委員長から小平RC、柳泉園RC中島町作業心得と安全要項について詳しい説明があった。

①今年二月におきたアメリカ軍の原子力潜水艦と宇和島水産高校の「えひめ丸」の衝突事故の原因が安全確認作業を怠ったことにある事を指摘され、日常の慣れている作業のなかにある危険性を再点検し、常に基本的な安全確認をしっかりと行つて事故防止につとめよう。

②車両関係  
朝一番での点検を忘れずにする事、作業中の車両にはできるだけ近づかないようにすること  
作業車両の運転時には前後左右の確認、センター内規定速度の厳守。

③缶ビン作業関係  
ビンの破袋のとき、ライン上のカゴを移動するときには声をかけて行う、缶及びビン選分作業をするときには充分にライン上の品物に注意して作業する事。

④スプレー缶の穴あけ作業  
作業は、必ず二人以上で行うこと、スプレー缶に残っている液体や、ガスの暴発には十分注意する事。

⑤供給、プレス機  
供給ピットの清掃または、いろいろな作業の為に入るときは、運転を止める。もしくは必ずそばに一人つける様にすること。プレス機稼動の際も必ず二人以上現場にいる事。

⑥事故、怪我、健康、欠勤、その他  
事故、怪我等が発生した場合直ちに責任者に報告し処置に従うこと。毎年実施する健康診断に基づき医師の勧告に従って各自健康保持に努める事。  
作業中は作業以外の私的な作業はしない事。  
一時間あまりの講習会だったが全員、新年度も無事故で作業する事を確認して終了した。(吉浦)



安全講習会の会場にて



市民・行政への緊急アピール

## 古着問屋はブラックホールではない

どしや降りの雨が降りつづくように

「集まり過ぎて古着山積み」「古着リサイクルピンチ」「引き取り一時停止も」などの見出しが新聞に躍っている。タオル業界が中国からの輸入急増に耐えかねて緊急輸入制限措置の申請を政府に提出した。

とにかく古着は集まる。古着と言っても、ほんとに着古した衣類は少ない。継ぎがあったり、ボロボロになった衣類などは全く無い。洗濯するか、クリーニング店に出せばまだまだ着られる衣類である。

集まるといつてもどれほどの量が集まるのか？数字で示してもピントこないかもしれない。当組合が委託を受けて東村山市の資源の日に回収する古布の量は平成十二年一年間で約440トン。人口が一四万人ほどである。一人平均3・1キロを排出している。これは赤ちゃんから高齢者までの数字である。この中にはカーテン、シート、タオルなども含まれているが大部分は衣類である。少なくとも積もって八割が衣類で一人平均年間2・5キロとなる。1人の市民

が年間数着出すとして何十万着と集まる。これは一市だけの数字である。

五年前は年間約220トンであったから、2倍の数字を示している。なぜ、こども増えたのか？着る物が使い捨てになったと観るのが妥当だろう。なぜ使い捨てになったのか。多分一着あたりの値段が非常に安くなっている事が大きな要因といえる。それと流行サイクルが短くなり次々と買い換えるからである。ワンシーズン着たら来年も着るのではなくその場かぎりで捨てる事が当り前のようになってきた。

安いなあと感心して衣類のラベルを見ると中国製とか台湾製などの表示が目に入る。日本の企業がこれら外国に生産工場を移して現地の安い賃金で製造して日本で販売する。またアジアの国々は日本や欧米の最新設備を導入し自国産業の充実を図って輸出によって経済発展をめざしている。かつての日本のように。

画して日本には大量の衣類があふれ、大量に廃棄される。

### ますます狭くなる出口

では資源として集められた衣類はどのように利用されるのかという疑問が湧いてくる。衣類と一口に言ってもその種類の多様さは数え切れない。皆様の家庭にある衣類を分類するとなるとどの様に分けるだろうか。年齢別、男女別、大きさ別、季節ごと、用途別、素材別、ファッション別、等々。古着問屋にはこれら多種多様な衣類や布類が混在して持ち込まれる。その中から禁忌品（マット、ジュウタン、縫ぐるみ、汚れのひどい物等）を取り除き、使える物を選び出す。作業は一着ずつ手作業で



溢れている古着の山

何万着とこなすのである。選び出された物から輸出用衣料、ウエス材（工場などの機械を拭く布）、反毛材（クッション、椅子や縫ぐるみの中身など）、となって再利用されることになる。ほとんどこの三種類である。その割合は輸出が四割弱、ウエス、反毛用としてそれぞれ二割り、残りは焼却されてきた。焼却費用は古繊維問屋が支払っている。

古着としてそのまま使える物は90%が輸出、国内の古着商で扱われているのは10%程度にすぎない。主な輸出先は東南アジア諸国である。その輸出価格は年々値下がりして、ある地域では八年前の半額にまで下がってしまった。輸出货量も集まる衣類の量に見合っ増えていない。

ウエスも安い輸入物が増え、国内価格を押し下げている。またウエスに適した素材衣料（綿100%物など）が少なく、同質性の繊維に還元する事が難しいポリエステルやアクリルその他化学系の新素材との混合織物が圧倒的に多く、リサイクル不向き物となっている。反毛材は背広などの量販店が下取りや売れ残り品を反毛工場に値を付けて搬入しているために、今までの古繊維問屋からの経路が



狭まってしまい、だぶついている。今まで述べた様に古着として入って来る量が増えつづけているの出口（輸出やウエス、反毛）が逆に狭くなってしまったのだから溢れるのは当たり前といえれば前だ。

### 食べ切れないものは食べきれない

溢れた物はどこにある？古着問屋に。古着問屋は生死の境に。

普通、商売は売れる物を選び、売れる量だけ仕入れる。売れない物までも無制限に仕入れる事はない。ところがこのしない事を古着問屋は行っている。いや、強制されているのだ。自分で選ぶ事もできず、量も決められずに。どうしてそんな事に？行政の古着回収日に何万の市民の方がそれこそ多種多様な衣類を出し、そのままそっくり古着問屋に持ち込まれるからだ。これはもう古着の捨て場だ。問屋は必死になって売れる物を選び出し、できる限り多くの量をリサイクルしようと努力をする。しかしリサイクルとして売れる量以上に入荷してくるのだから余るのは当然だ。「全国ウエイスト組合連合会」（以降全ウ連）はその余った分の返却をオズオズと自治体に申し入れている。全ウ連はこの

余剰分を「リサイクル不能品」と呼ぶ。この余剰分の中にはリサイクル出来る物はいくらでもある。だが需要がないのだから返す以外方法がない。本来なら自分で売れる物を選び売れる量だけ仕入れたのだが前述のようにそれが出来ない事情を是非市民の皆様が解って頂きたいのです。

全ウ連はこの間の苦しい状況をつぎのように述べている。

古紙、アルミ缶、ビン、ペットボトルなどはそれぞれに生産工場に還流され再商品化されるが、古着、布類は紡績工場にもアパレル業界にも量販店にも還流されていません。彼らは1kgたりとも「リサイクル原料」を購入してくれません。私達業界のみが繊維リサイクルの全責任を負わされる事は余りにも過酷で不条理と云わざるを得ません。年々増える禁忌品や次々開発されるが再活用を悩む化学繊維物の廃棄処理負担を私ども業界が全て負担してきましたが、それも限界点に達しております。今年四月から実施された家電リサイクル法、じき実施される食品衛生リサイクル法などと同じように繊維、衣類分野にも生産者責任を問う法の制定を働きかけるとともに繊維の再利用技術開発の推進を

訴えていきたい。これらの事は一朝一夕にできることではないので、禁忌品および余剰品を当面、自治体が引き取って、処分（焼却）する以外にはないのではないだろうか。スーパーでもコンビニでも食料品は溢れている。衣料もしかり。日本人は衣食足りて礼節を知るようになっただろうか。

（古川ウエス商会 社長

当組合理事 古川敏雄）

### ヴィーナス通信・配送依頼増える

ヴィーナス通信は、年四回発行を目標にして、今回で一九号を数えることができました。編集委員は、仕事の合間を縫って各界の指導者にご寄稿文を頂き、また取材に走り回っています。編集作業は仕事の終わった夜七時からコンピュータと苦闘しながら、すべて手作業で行っています。関係各市のリサイクル担当者・集団回収市民・廃棄物減量審議委員等に送らせて頂いています。口コミで多摩地域以外の方からの配送依頼が急増しています。マスコミからの問い合わせなどもあり驚いています。これからも、最前線で働くりサイクル業者の目から見た新鮮な情報をお届けするよう努力致します。皆様からの情報も送って下さい。

## 当組合のホームページにどんどんアクセスして下さい！

・リサイクルに関するご意見・ご質問等がございましたら、掲示板やEメールにどしどしお寄せ下さい。（リサイクル全体・古紙、古繊維、金属などのリサイクル品目について・当組合の広報誌「ヴィーナス通信」の内容についてなど、リサイクルに関することならばなんでも構いません。）

・皆様から寄せられたご意見・ご質問等には、当組合よりすみやかに回答させていただきます。

ホームページアドレス：<http://www.h-recycle.or.jp/>

Eメール：[ri3196@oak.ocn.ne.jp](mailto:ri3196@oak.ocn.ne.jp)

皆様からのたくさんのアクセスお待ちしております！



## 「古着・古布・着物がリフォームで変身」

美住リサイクルショップ運営委員・田原久子

脱焼却、脱埋め立て、ごみを燃やさない、埋め立てない。美住リサイクルショップは「資源循環型まちづくり」に向けて、市民と行政が主体的にごみ減量、リサイクル活動の普及および推進のために資源の有効利用を図る施設です。美住リサイクルショップ運営委員会も循環型まちづくりを全市に進めるため、様々な事業を展開しています。

運営委員会では、ごみ減量、リサイクルを推進する事業があり、衣料リフォームグループもその中の一つです。毎月一回、日曜日に古着、古布、着物を使った、リフォーム講習会を開催しています。捨てればごみ、活かせば資源、その資源も少し手を加え、リフォームすると、古着が素敵な自分だけのオリジナル作品に変身します。特に着物などは、捨てるに捨てられず、タンスの中にしまいこんであります。

おばあちゃんの形見、お母さんの形見、お姉さんの形見、嫁入りする時に持ってきた着物、そんな着物がリフォームで作務衣、ジャンパー、スカート、おしゃれな上着に……。

帯からベスト、ズボンに帽子に、Yシャツはエプロンや前かけに、傘布は買物袋やリュックに生まれ変わりました。傘布からの買物袋やリュックは、とても軽く、強く、水もれせず、マイバックとしても便利です。

美住リサイクルショップ夢ハウ



自分でリフォームした服でファッションショー  
(3月17日だいこんクラブ15周年記念にて)

スでの講習会にたくさんの方が参加されています。一つの講習会は二回講座で開催しています。毎月一回、日曜日の午後、三時間の講習です。夢ハウス・活動室で、講師の先生の説明を聞き作業が始まります。あつという間の三時間、夢喫茶の入れてくれた温かいコーヒーを飲みながら楽しくおしゃべ

り、一息ついた所でまた作業の開始、ミシンの音も軽やかに段々仕上がっていきます。

二回目の講習会の時には、話もせず、ただ手を動かし、運営委員のスタッフメンバーも呼ばれて教えています。時間の経過と共に形が見えてきます。出来上がったオリジナル作品をみんなで見せ合い、身につけ、笑顔で記念写真、とっても素敵な「作務衣」が出来ました。

「帯からベスト」は、一二月・一月の二回講習で行われ、皆さん、すてきな帯を持参し、早速いつもの用に作業の開始です。

二種類のベストの型紙を用意しサイズに合わせ、M・Lの型紙を取り、講師の先生や運営委員の指導の中、作業は進みます。日頃、ミシンを踏んでいる人も多く、慣れてるので、皆さん段取りも良く、帯からとてもおしゃれなベストが出来ました。全員でベストを着、鏡の前で感激、記念写真にハイポーズ。ちよつと手を加えるだけで、自分だけのオリジナル作品に変身します。

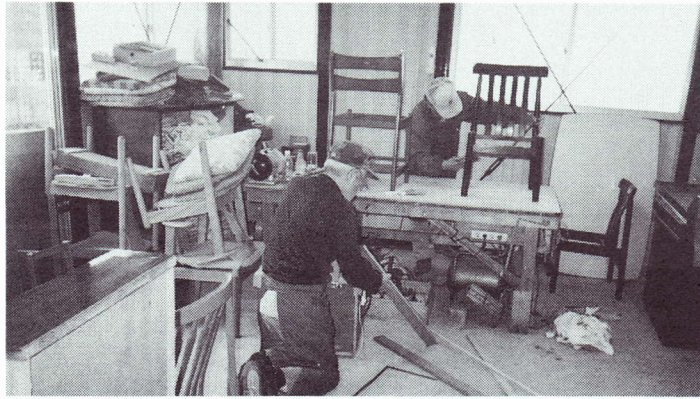
これからも色々企画し、ごみ減量、リサイクル活動を通し、多くの市民の方に喜んでいただきたいと思っています。

## リサイクルショップ探訪

リプレ小平は、小平市リサイクルセンター内に併設される家具及び木工品を、再商品化し販売するリサイクル施設です。三時の休憩時間に、お邪魔をして見学とお話を聞いてきました。所長の菊地さん他スタッフ六名(女性二名)の計七名のみなさんは、とても丁寧な作業内容や苦勞する事などを、話してくれました。市と、シルバ―人材センターによる事業と言う事で高齢の方を想像していたが、皆さん元気で楽しく作業をされている様に思えました。

リプレ小平の主旨は、粗大ゴミで出される木工家具を、可能な限り少ない費用で再商品化し、市民にリサイクル品として購入してもらいゴミの減量をはかる事と、菊池所長は話していました。持ち込まれる家具などは一日から三日程度で手直しされるそうです。筆筒や机などの品物が倉庫いっぱいになり並んでいてすべてが私の見たところ新品に思える仕上がりでスタッフの技術の高さがうかがえました。二個、三個の家具で一つの物を作り出す事もよくある事で、それも作業の楽しさなんだと関心しました。





リプレ小平・家具の修理作業場にて

話を聞いていた間にもお客さんが、家具を見に来ていて平日でもこれなら土、日は結構にぎわっているのでは？と聞いてみると、市外からもクチコミでだいぶ見えるし、リピーターも多いそうです。

また、数は多くはないが、家具としてでは無く桐などの高級木材の品を材料として注文して行く人もいる様です。

購入した家具などは、配達もしていて市内は(小)五〇〇円(大)一、〇〇〇円、市外はその各倍です。配達には結構大変な作業らしく、

お年寄りのお客さんなどは、二階三階まで運ばなければならぬし寸法をはかって来ていても家に入らなかつたりして持ち帰ったりもする様です。価格は、かなり安く家財道具一揃いで二万円位でいいそうです。私も独身なので、その時は、リプレ小平のお世話になるうと思つた位です。

(土井健一郎)

〔リプレ小平の営業について〕

営業日：月・火・金・土・日(水・木は休み、祝祭日は営業)  
営業時間：午前一〇時～午後五時

### 課題山積、二一世紀の資源リサイクル

去る三月一八日(日)、東京・多摩市のエコプラザ多摩(多摩市立資源化センター)で、市主催のエコフェスタ多摩二一というイベントの一つとして、『資源リサイクル・ここが問題』と題してシンポジウムが行われた。このシンポジウムは、昨年十月の『多摩とことん討論会』の続編としておこなわれたものである。

シンポジウムでは、ダイナックス都市環境研究所長の山本耕平氏がコーディネーターで、パネラーに経済産業省の大道正夫氏・永和

鉄鋼(株)所長の松宮憲治氏・豊島硝子(株)専務取締役の菅沢和志氏・(有)土井壘店代表取締役の土井俊雄氏などが招かれて、主にびん・缶の問題について議論が行われた。

議論では、まずそれぞれのパネラーが、びん・カレット・缶のリサイクルの現状について説明した。びんは、リターナブルびんは環境には優しいが利用率が低く、現状は厳しいこと・回収方法は、行政に回収させるのではなく、びん商が独自で回収と選別を行う方がより質の良いリターナブルびんができることなどが報告された。

カレットは、指定法人ルート(運賃・処理費を指定法人が負担する)や事業系から収集されたカレットの方が、行政によって収集されたカレットより再商品化の実績が高く、利益がでると報告された。

缶は、スチール缶などでキレイなもの売れるが、現状ではなかなかキレイなものが集まらず、価格が下がって困っていること・今後は、さらにしつかりとした技術力を備えてリサイクル率を高めていきたいと報告された。

また、行政からは昨年四月から施行された容器包装リサイクル法について説明があった。続いて、活発な質疑応答が行わ



シンポジウム会場にて

れ、この中で、企業中心に考えていたのではリターナブルびんの利用システムは回らない・びんの規格の統一はどうなっているのか・ペットボトルからペットボトルへのリサイクルシステムについて・事業者のリサイクル費用の負担についてといった様々な課題が浮き彫りになった。

最後に、事業者のリサイクル費用の負担をふやすべきである・リターナブルびんを利用すると得をするというシステムを充実すべきである・一般廃棄物と産業廃棄物の違いを問わずにゴミ問題を考えるべきである・国民が、リサイクルの分野にもっと関心をもって、様々な意見を出すことが必要であるというように結論がまとめられて、シンポジウムは終了した。



### 真のリサイクル社会の構築を目指して

去る二月二六日(月)と三月七日(水)に、東京・立川市の多摩消費生活センターで、『環境を守るためにくふたつのリサイクル論』と題してリサイクル講座が行われ、リサイクル否定論・肯定論双方の立場からリサイクルに対する見解が披露された。

①否定論「リサイクルしてはいけない」：芝浦工業大学教授・武田邦彦氏

大量に「物」を使う人にとっては、リサイクルは「夢」である。しかし、それは「現実」ではない。まず、リサイクルには工学的に矛盾がある。人間が、リサイクルをするきっかけは、新しいうちに物を捨てる(ペットボトル・アルミ缶のように一回使っただけで捨てる)ところにある。しかし、材料工学の見地から言えば、「材料は使えば必ず劣化する」(例えば、老人の皮膚を赤ちゃんと移植することとはできない)ので、一度使ったものはリサイクルできないということになる。また、「資源」とは、「自然が集めてくれた資源」(石油・石炭)生物の死骸が一所に集積したもの、鉄鉱石)太古の昔の海に溶けていた鉄が、生物や地殻

変動で鉱脈となつたものなど)ことである。そしてこの「資源」から作り出した鉄・銅・ペットボトルなどは「物」そのものであり、「資源」ではない。したがって、「自然が集めてくれた資源」が枯渇しても、それを「物」そのもののリサイクルで穴埋めすることは難しく、その点で資源工学の見地からもリサイクルは矛盾しているといえる。

次に、リサイクルは自然の摂理に反している。人間は、長い間毒物の浄化を、「自然の浄化作用」に頼ってきた。今、この作用をリサイクルに求めるとどうなるだろうか。リサイクルも必ず毒物の浄化が必要だが、現在のリサイクルは廃棄物の量を増やすだけで、毒物の浄化をしておらず、そのために毒物のレベルが上がり、いつか毒物の影響を受けた障害者を出すことになる。その点から言えば、焼却は、廃棄物の量を減らして毒を取り除くことになる。

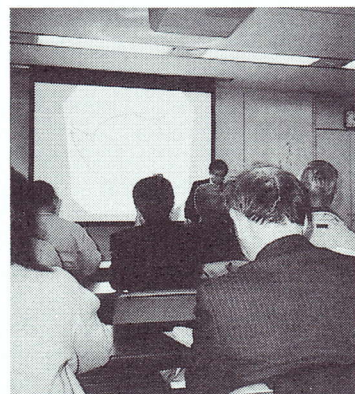
最後に、リサイクルは他人に任せることを教えているに過ぎない。子供は、「紙を束ねる」・「ペットボトルをリサイクル用の箱に入れる」というように、廃棄物の分別

作業をしただけで、リサイクルをしたと誉められる。しかし、実際のリサイクルは、専用の施設で行っているものであり、分別作業をしただけでリサイクルしたとは言えない。このことから、リサイクルは子供に「何でも他人にやらせる」・「目の前のものだけを綺麗にしておけば良い」ということを教えているに過ぎないのである。

②肯定論「リサイクル、もう待たなし」：慶応義塾大学経済学部教授・細田衛士氏

リサイクルは、ゴミ減量という目的を達成するための一つの手段である。ゴミを最終処分場に持ち込んで埋め立てるにしても、焼却施設で焼却処分するにしても、施設の建設費用や廃棄物の処理費用に高いコストがかかる。そしてこのために行政は、多額の公的資金(市民の税金)を使うことになる。また、ゴミが減らなければ、最終処分場や焼却施設が追いつかなくなり、ゴミの行き場を失ってしまう。

リサイクルによるゴミの減量は、廃棄物問題をこのような経済性・合理性の通用しない世界から脱却せしめるものである。もちろん、リサイクルにもコストはかかるが、最終処分場への埋め立てや焼却処



立川・リサイクル講座にて

分よりは安く済むので、同じゴミの処理をするならば、コストの安い方を選ぶのが妥当である。また、リサイクルは静脈経済の発展とおだやかな経済成長をもたらす。無駄な最終処分場や焼却施設を造り続けることは、国の経済力を弱めることに他ならない。むしろ、行政がリサイクルのコーディネーター役となれば、自然と静脈産業が立ち上がり、必要なりサイクル(無理のないリサイクル)が行われることになり、それが静脈経済の発展を促し、国の経済力を高めることになる。

二つのリサイクル論を聞いて、否定論の方が、机上の論理でリサイクルを考える理想論で、肯定論の方は、昨今のゴミ問題を把握した現実論で、また両者とも、循環型社会構築の根本は、廃棄物の発生抑制が大前提であることでは一致していた。



## 私の履歴書

## (有)古川ウエス商会代表取締役

古川敏雄

私は、昭和一六年九月に、北海道のオホーツク海近くの遠軽町という小さな農村で、八人兄弟の四番目として生まれました。

小学校・中学校・専門学校を卒業後、昭和三五年に十八歳で、知人の紹介で東京に出てきて、高原商店で住込みで働くことになりました。初めての東京は、見るものも聞くこともおどろく事ばかりでした。また、初めての古繊維という仕事はきびしく、休日は毎月一日と十五日の二回しかないのがその頃としては当たり前であり、その間は毎日毎日一生懸命働きました。休日には東京タワーや浅草などに連れて行ってもらい、北海道では口にも食べ、実に東京という所の大きさ・人の多さなどに圧倒されたものでした。

一方で、同僚三人で上京した内の二人が、一、二年の間に辞めて田舎に帰ってしまい、心細くて極度のホームシックにかかってしまった事もホロ苦い思い出として残っています。それでも、この時に古繊維という仕事・建場の引取

り・選分・ウエスの製造などを身につけられたことが、今の仕事の下地になっていていると思います。

当時(昭和三四〜三八年)は、高度成長初期の非常に景気が良い時代であり、モス(毛物などのこととで、一貫目(三・八g)二〇〇〇円以上する)や裁落(紳士服の裁ち落とし)など今では考えられないような品物で商売が成り立ち、活気がありました。

昭和四一年に結婚、清瀬において後継者として営業が始まり、二男一女をもうけました。この頃にはボーリングもはやり出し、よく働き良く遊んだ、若く楽しい時代でもありました。

昭和四六年四月より、昔の東資協田無支部の支部員になり、昭和四七年九月に先代が亡くなって、古川商会から(有)古川ウエス商会に法人登記しました。その後、田無支部より、東資協東多摩支部と変わって、時代と共に仕事の内容など、どんどん思いがけない方向に形作られてきました。

二〇年前、家と作業場を建て、早朝より遠方配達・引取り・ウエス製造と、やがて到来するバブルの時代は多忙を極めました。それも若いからやってこれたのでしよう。人手不足にも随分悩まされ

ましたが、従業員もよく働いてくれました。

昭和六三年、昭和天皇が崩御され、変って平成の年号がついた時、初めて味わう感慨深いものがありました。この頃かもっと以前になるか、リサイクルショップという商売がやり始め、選分の分野に中古衣料が入り、アジア方面などに輸出され、ニユースなどで日本のネームなどが入った衣類を身につけた子供などを見かけるようになり、仕入れに来る人達も出入りするようになりました。

平成五年に東多摩再資協が設立し、現在理事として協力させてもらっています。また、平成一〇年には、東資協の中国視察団の一員として中国に行き、勉強させていただきました。

この業界もまだまだ迎える試練が多く、大げさに云えば、社会全体の問題の渦中にある我々業界は、衣料のリサイクルに一生懸命努力しています。デフレの世の中、衣料は消耗品扱いになり、その為大量に排出されたリサイクル衣料は飽和状態になり、出口が一杯になっています。そこで我々業界としては、できれば衣料をもっと大切に使うてもらいたいなと思っています。

私は、仕事を通して様々な人々と出会いや関りをもたせていただき、ある時は助けたり助けられたりと、思えば四〇年近くの長い年月をあっという間にかげぬけた感があります。

宇宙旅行も夢ではない世の中、我社にパソコンが導入され、勉強に四苦八苦ししています。しかし、これからの時代の波に、二一世紀はどのような時代が変貌して行くのかと考えるとき、時勢に翻弄されず、しっかりと現実をみきわめながら歩んで行きたいと思っっています。又、若い人達にも多めに期待するところですよ。

近頃の趣味は釣りと将棋、仕事と共に精を出して行きたいと考えていますが、今年には五人目の孫も七月に生まれることで、孫とのコミュニケーションが先になっ



(有)古川ウエス商会にて



### リサイクルニュース

#### 再生ペットボトルで紙を製造

大王製紙は、回収したペットボトルを使用して合成紙を開発し、発売を始めた。

一・五割のペットボトルで、坪量八〇分の紙が約一平方メートル生産される。

商品名は「リペットキング」と言い、和紙調の風合いで耐水性・対候性・印刷適性を備えて、カレンダーやポスター用紙として最適とPRしている。

製法は、ペットボトルを細かい繊維状にして、紙と同じ様に漉き上げ、できた物をさらに熱処理してフィルム状の合成紙にするという。

ただし、価格は従来のものより二〜三倍高くなるのでリサイクル推進商品として理解を求めるとのことだった。

この紙を古紙として回収した場合どうなるのか、メーカーに聞いた。ただし、従来の合成紙同様で製紙原料としては禁忌品となるが、ロットがまとまれば再生可能で、焼却してもダイオキシンが出ないと強調していた。

(K・T)

### 回収業界冬景色

バブルはじけ

資源価格 下げたときから

回収業界 雪の中

古紙も 古布も 鉄もダメと

誰も 無口で

市民団体も 嘆いてる

さよならしたい

狂ったリサイクル

凍えそうな

市況見つめ 泣いていました

嗚呼あー 回収業界 冬景色

(TKO)

### 川柳

宝くじ

抽選日には

可燃ゴミ

リユースを

望んでいるよな森首相

(逆ネジ)

### 行事・行動

#### 二月

四日… 仕事始め

一日… 定例理事会

十五日… 東京R団連幹事会

一日… 段ボールリサイクル協会

二四日… 東村山市廃棄物減量審

二五日… 古紙センター業務委員会

二六日… 小平市廃棄物減量審議会  
二九日… 多摩R団連幹事会  
三〇日… 小平リサイクルセンター安全会議

#### 二月

二日… 日資連理事会(大阪)

六日… 東村山市ペーパーリサイクル講習会

古紙循環プロジェクト

… 定例理事会

一日… 集団回収実施業者講習会

一九日… 財務委員会

二二日… 新聞リサイクル推進会議

… 広報委員会

二三日… 東大和市蔵敷公民館市民研修会で講演

二六日… 多摩消費生活センターシンポ

二七日… 東京R団連幹事会

#### 三月

三日… 関資連拡大理事会(千葉)

七日… 多摩消費生活センターシンポ

一〇日… リサイクルセンター従業員安全講習会・ポリーング大会

一二日… 定例理事会

一四日… 段ボールリサイクル協会

十五日… 古紙センター理事会・業務委員会

… 広報委員会

一八日… 多摩R団連シンポ

二一日… 日資連リサイクル推進委員会  
二二日… 東久留米市廃棄物減量審議会  
… 広報委員会

二三日… 小平市廃棄物減量審議会

二六日… 新宿区リサイクルの会シンポ

二八日… 古紙循環プロジェクト

### 編集後記

今号にご寄稿くださいました村正子様、大変ありがとうございました。日本人は教育水準が高い国民なのに、なぜか、政治とリサイクルは遅れていますね。

日本のタオル組合が、中国からの安い製品がたくさん輸入されることに對抗して、政府にセーフガードの発動を申請したそうです。タオルだけではなく、野菜も洋服も電気製品も、安いと感じる品物はほとんど輸入品であり中国製が多いです。消費者の数の方が圧倒的に多いのですから、正義は喜ぶ人の多い方に傾いてしまうはず。回収業界も、他業種産業の参入が目立ち、その競争に苦慮しています。その為にも、今まで以上に、市民に喜ばれ、安心してリサイクルを任せられる、組合作りを努力して行きたいと思っています。

(吉浦)